令和４年度　障がい者通所施設かがやき　事業報告

１．令和４年度　事業実績

登録利用者数	２７名
年間延べ利用者数	４８４３人
１日平均利用者数	１９．７人
開所日数	２４５日

※性別内訳

男　性	女　性
１４名	１３名

※支援区分内訳

区分１・２	区分３	区分４	区分５	区分６	計
				２７	２７

※年齢別内訳

18～19 歳	20～29 歳	30～39 歳	40～49 歳	50～59 歳	計
3	１４	9	1		２７

２．令和４年度　事業の総括事項

（１）看護職員の増員と定着

・昨年度末に看護師が全員退職するという事態となり、年度当初は法人内の他事業所から応援派遣にてサービスの継続ができた。しかし、それでも看護師の人数不足により利用者（特に医療ケアが必要な方）の受け入れを制限させていただいたり、ご家族による送迎をお願いすることがあった。６月頃より利用制限なくサービス提供ができるようになった。

・看護業務と生活支援業務において、業務の明確化を図り、お互いの業務を理解し協力することを目標に１年取り組んだ。

・重症の利用者もおられ、看護師の精神的な負担が大きくなっている。常にご家族、主治医と連絡を取りながら支援に当たっているが、今後、少しでも看護師の精神的な負担が軽減するような取り組みを考えていく必要がある。

（２）安心・安全なサービスの提供

①新型コロナウイルス感染症への対応措置の徹底

・今年度も新型コロナウイルス感染症への対策を国・県・市の指導に基づき行なった。当施設利用者は病弱な方も多く、ご家族も感染については慎重になられていることもあり、都度の情報提供は迅速に行うことに心掛けた。

・7 月に職員が陽性となり、出勤の状況から利用者と職員全員を対象にした PCR 検

査を実施した。結果は全員陰性だったが、検査の結果が出るまでの２日間を閉所とした。
他、利用者・職員数名が感染されたが大事に至らず、サービスも継続することができた。
・長引くコロナ感染対策での活動制限により息苦しさを感じて、情緒不安定になられる利用者もおられたが、できるだけ安心で安全に通所していただけるように心掛けた。
②重症心身障がい者に特化した生活介護の実施
・支援の基本目標を「心地よい居場所の提供」、「健やかな生活への見守り」、「その人らしさの発揮」、「他者とのつながり」とし、ご本人の成長や発達の視点を軸に取り組んできた。
・生活介護事業の実施に際しては、サービス管理責任者を中心に、個別支援計画及びリハビリテーション計画を策定し、それに基づく支援を展開した。
③利用の状況
・利用登録者数は、特別支援学校高等部を卒業された３名が利用開始され２７名の利用者となった。
・開所日数は２４５日で、延べ利用者数は４８４３名、1日平均利用者数は１９．７名であった。利用者数の減少の要因は、６月までの利用制限、体調を崩しての長期入院（男性利用者が食道裂孔ヘルニアで５０日の入院、女性利用者が骨折で４０日の自宅療養、男性利用者が胃ろう造設のため３０日の入院)、コロナ禍で入所施設や短期入所施設の外出制限のため欠席されることも多かった。また、今年度もコロナ感染症の拡大のために利用を自粛される利用者もおられた。
④送迎の実施
・送迎については今年度も車両１１台による送迎体制を組み、毎日の朝夕の送迎を実施した（送迎対象者２５名、家族送迎２名)。
・コロナウイルス感染症対策で乗車前の検温、走行中の換気、マスクの着用、使用後の消毒など感染予防に努めた。
・送迎中に交通事故が起きてしまった。帰りの送迎時にかがやき敷地内から左折で出ようとした際に右側から来た車に接触した。全職員に再度送迎時の安全運転について確認した。
⑤家族との連絡連携
・日々の活動や体調の様子については、毎日の連絡ノートへの記載や送迎時に保護者の方に直接報告を行うとともに、11 月に個別に保護者懇談会をし、個別支援計画及びリハビリテーション計画の評価内容を確認していただき保護者の方からのご意見や要望をお聞きする機会とした。毎年行っている保護者懇談会の全体会は昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の流行により中止した。
⑥福祉機器の導入

・ノーリフト介護を導入し、天井走行リフト等の福祉機器を使用することで職員の腰痛の軽減と利用者の危険や苦痛の軽減につながった。全職員が安全に使用できるよう繰り返し使用方法の講習を行い、すべての職員が安全に留意するように徹底した。

⑦利用者の健康管理

・日々の利用者の健康管理と異常の早期発見に努めた。毎日のバイタル測定や月１回の体重測定を行い結果を保護者へ伝えることで、家庭での体調管理にも活かしてもらうことができた。

・それぞれの利用者の主治医に指示書をもらうことで、てんかん発作時に適切な対応ができたり、医療ケアの必要な利用者に対しても指示書に基づきケアすることができた。

・今年度も引き続き、国立病院機構紫香楽病院の医師に月１回来所していただき、利用者の心身の状況や障害特性およびアプローチにかかる専門的な手法等についての指示・助言を受け、より専門的な支援ができるよう学ぶ機会とした。また、保護者からの相談や利用者の状態を直接診てもらい助言をいただいた。

・年齢を重ねるにつれて、体調やてんかん発作にも変化が出てきている利用者もおられ、発作時の観察項目などを一覧表にして記入し、通院時に主治医にわかりやすく伝わる工夫をした。

・医療ケアの必要な利用者が年々増えていくので、職員に対する勉強会を行なう機会が増えた。人工呼吸器の説明に業者に来ていただき講習会を開いたり、また職員研修のなかでも利用者の病気の理解を深められた。

利用者をスムーズに受け入れられるように在学中に実習だけでなく学校訪問を行ない、日中の利用者の様子を知ることができた。また、必要物品を事前に準備することもできた。

（３）療育活動の積極的な展開

①療育活動への取り組み

・本年度も様々な活動プログラムを準備し、多彩な療育活動に取り組んだ。また、ユニット制により少人数での活動も可能になり、利用者それぞれに適した活動を実施することができた。活動の「ねらい」「目的」を全職員で周知し、観察、評価につながった。

・療育活動においては、活動の基本となる個別の機能訓練に重点を置き、ご家族からの聞き取りや要望を踏まえて、２名の理学療法士と連携を図りながら毎日取り組むことができた。感覚遊び、音楽活動、創作活動、エアトランポリン等の活動をこれまでの経験に基づきながら工夫して実施した。

・今年度も新型コロナウイルス感染症の影響で「密」を避けての活動になったが、一定の制限を設けての活動にも慣れ、様々な工夫ができるようにもなっ

た。しかし、利用者の中にはコロナ禍でのストレスで情緒不安定になられる方もおられた。一人ひとりの利用者の変化を感じ取り、支援することに努めた。

②ミュージックケアについて

・今年度より月２回（各班１回）療法士によるミュージックケアを実施した。継続的に取り組まれる中で、療法士による音楽とのふれあいにおいて、個々への良い刺激となり、普段とは違った反応や感情を見せて下さる様子が窺えた。

③快適な入浴

・希望される利用者への入浴を週２回実施した。２３名の利用者が希望され入浴していただいた。適切に福祉用具を使用し、安心で快適な入浴を提供することができた。

④食事サービス

・ミールサービス谷口（長浜市）より保温容器での配達。汁物と米飯は施設内で調理師による調理での食事を提供している。

・施設内のキッチンでの調理師による調理は、日々に工夫し多様なメニュー、また暖かい汁物と米飯を提供することができた。

・食事介助については、利用者一人ひとりの個性や食事ペースに配慮し、個別対応での食事としている。一人ひとりの状態をしっかり把握でき、利用者も安心して食事することができた。

⑤年間行事

・季節感を感じられ、利用者が楽しめる行事を計画、実施した。

８月２５日　夏祭り（２班）
９月１５日　夏祭り（１班）
１０月２７日　ハロウィンパーティ（２班）
３１日　ハロウィンパーティ（１班）
１１月２８日　秋祭り（焼き芋パーティ）（１班）
１２月２１日　クリスマス会（１班）
２２日　クリスマス会（２班）
１月１２日　新年会（２班）
１３日　新年会（１班）
２月１５日　成人を祝う会
３名の利用者の成人のお祝いを行なった。
２月　１日　節分豆まき（１班）
３日　節分豆まき（２班）
月毎　誕生日お祝い食事会

（４）会議および研修の計画的な実施

①会議およびミーティングの実施

・職員会議を定期的に実施し、職員相互の研鑽、新たな取り組みへの立案、課題

解決への協議などについて職員相互の意見を交わす機会とした。また、日々のミーティングを充実させるため、職員朝礼（10:00）とミーティング（17:00）を実施した。日々の打ち合わせと今取り組むべき課題について話し合い、職員相互のチームワークを固める機会とした。

②職員研修

・施設内研修

今年度は施設内研修に多くの職員が参加できるように６月と１０月に午前中のみの開所の日を設け、午後に研修の機会を設けた。

６月２９日　虐待防止研修

１０月２６日　リスクマネジメント研修

（５）地域交流、地域支援活動

①ボランティア活動の受け入れ

施設見学の受け入れ

・新型コロナウイルス感染症流行の影響で当初予定されていた施設見学等はすべて中止となった。

③小中学校への福祉教育活動

・新型コロナウイルス感染症流行の影響で予定されていた車いす体験学習が中止となった。

④就業体験実習の受け入れ

・三雲養護学校の高等部３年生（１名）の受け入れを行ない、卒業後の進路として検討する機会としていただいた。支援学校卒業後、当事業所への利用を確認した。

（６）事故防止対策の充実

今年度はヒヤリハットが２０件、事故報告が８件であった。職員ミーティングで確認し、個々の要因分析を行い、再発防止に努めた。また、ヒヤリハット報告を多く出すことで大きな事故を防止できる効果が考えられるので今後も継続していきたい。

① 事故報告（８件）

・注入ポンプの速度を 100ml/H のところを 150ml/H で注入してしまった。

・利用者が傍におられた利用者の手を掴んでしまわれた。左手首に 3 か所傷ができてしまった。その時、職員は他の利用者の介助でそばを離れてしまっていた。

・散髪を申し込まれていない利用者を間違えて散髪してしまった。

・立位台からトイレ内のオムツ交換台へ降りる際に、後ろにのけぞられ後頭部を窓の縁にぶつけてしまった。少し発赤はあったが大事には至らなかった。

・マットに座って過ごされている時に後ろ向きに倒れられて床に後頭部をぶつけ

てしまう。特に外傷もなく、その後も変わった様子なく経過。

・活動中に利用者がバチでタンバリンを叩いておられたが、バチを落とされたので職員が拾おうとした時にタンバリンを投げられ、他の利用者の頭部に当たってしまった。特に怪我等はなかった。

・昼食後、マットに降りて過ごされていた際に起き上がって動かれ、隣のマットに横になられている利用者のところへ行かれた。その時に横になっていた利用者が驚かれたこともあり、掴みかかってしまわれた。左下唇から出血、顔に2か所小さな傷、左手首に3か所爪痕のような傷ができてしまった。

・送迎時、かがやきから道路へ左折で出ようとした際に右側からの車に接触してしまう。同乗していた利用者、運転職員ともに怪我等なく、大事には至らなかった。

② 屋上からの漏水について

・1月３０日深夜、屋上に設置されているエコキュートに水を送る配管が凍結により破損し、破損個所から水が流れ出た。また、屋上の排水ドレンが積雪により排水の妨げになったこともあり、水が施設内へ侵入し、各部屋での漏水となった。

このことにより、２日間閉所することとなった。今後の対策については、施工業者と検討中である。

３．次年度に向けた課題

・今年度は看護師が全員入れ替わる事態となったこともあり、利用者の受入人員数も19.7人に留まった。次年度は利用者の受入人員数（1日平均利用者数）を増やせるようにしていく。そのためにも、職員、特に看護職員の育成と定着が課題である。

・重症な利用者への対応に看護師の精神的な負担が大きい現状がある。主治医や地域の支援者との情報交流の機会を持つなどして施設職員への精神的な負担を少しでも減らしていきたい。

・療育活動の内容については、一人ひとりの可能性や興味の拡大、取り組みへの楽しみなどが発見できるように、主任を中心に活動プログラムをさらに工夫していく必要がある。また一緒に活動する仲間の存在についても意識し、相互に関係性を築いていける取り組みを見つけていきたい。そのためにも専門的な視点で実践に当たる力を職員全体が身に着けていく必要がある。

・看護師、療法士、生活支援員がそれぞれの専門性を十分に発揮し、利用者一人ひとりの意思や課題、ニーズをもとに、充実した生活が送れるように適切な支援内容を検討し提供する必要がある。また、定期的にモニタリングを行い、支援内容の見直しを図っていく。

・毎日の送迎で安全について最大限に注意を払うことが求められる。定期的な安全運転への確認の機会を設けていきたい。

・各利用者の家庭状況も様々で、生活介護サービスの提供のみならず、家庭事情に応じた支援についても、他サービス担当者との連携を図り、可能な範囲で支援を実施していく必要がある。